

読切り連載

アカンタレ勘太 <1>

作 いのしゅうじ

にゆうがく

おまわりさん帽子

勘太が小学校に入学した。
おじいさんがとてもよろこび、おいわいに学生帽をおくってくれた。
勘太はこの帽子をきりっとかぶり、おかあさんにつれられて学校の門をくぐる。金次郎さんがむかえてくれた。

金次郎さんは、たきぎを背にしょって歩きながら本をよむ二宮金次郎の像のこと。勘太は帽

子をぬいで、金次郎さんにびよこんとおじぎした。もういちど帽子をかぶったとき、そばにいた二年生の勝也がはしゃぎたてた。
「アカンタレ勘太、おまわりさん帽子」
勘太はなんのことかわからず、ぼーっとしている。
すると、勘太とおなじ新入の子ら4、5人がいっしょになってふざける。
「アカンタレ勘太、おまわりさん帽子」
みんながかぶっている帽子は波だっているけど、勘太のはてっぺんが平だ。ときおり巡回にくるおまわりさんの帽子のようなので、みんなが



わらったのだ。
勘太は三つになっても歩けなかった。ほとんどの子は1歳半くらいには歩きだす。3歳にもなれば、自転車ではしりまわっている子もいるというのに、勘

太はよっちらよっちらとはいはいしている。

おかあさんは買い物にいくとき、いつも勘太をおんぶする。と、近所のおばさんたちが、「あのこ、アカンタレやねえ」

と、かげぐちをした。あっという間にうわさが広がり、悪ガキどもから勘太にアカンタレをつけて「アカンタレ勘太」とよばれるようになった。

おじいさんは、「この子は一生歩けんやろ。かくごしておけ」

と、なんだか勘太のおかあさんにいい放ったが、おかあさんはそのつど、きりっと言いかえした。

「わたしが歩けるようにします」

勘太がひょっこり歩きはじめたのは3歳と3カ月くらいのころだ。

お兄さんの淳吉がつくえの上で飛行機のもけいを作っているとき、勘太がいすにつかまり立ちした。

そのままひよろひよろと二、三步あるいているのを、ハサミをさがしていた淳吉が気づき、大声をあげた。

「勘太、歩いてる」

台所にいたおかあさんがとんできた。

「カンちゃん、やったね」

勘太をだきあげるおかあさん、涙をぼろぼろながしてる。

あくる日、となりまちにいるおじいさんがやってきて、勘太にやくそくした。

「学校に上がるとき、帽子を買うたる」

「帽子なんか……」

とけげんそうなおかあさんに、

「ふつうのとちがう。りっぱな大人がかぶる。そんな帽子や」

おじいさんは大阪駅のえらい職員さんにあこがれていた。いくつもの赤や金色の線がついた帽子をかぶっているからだ。

さすがに勘太におくった帽子に線はないけど、おじいさんの気分は「大阪駅の職員帽」。

勘太の町から大阪駅まで電車で1時間半もかかる。ほとんどの子は大阪駅に行ったことがない。勘太の帽子を見て、おまわりさんの帽子とお

もうのもむりはない、

勘太のおかあさんは子どもたちをにらみつけた。

「この帽子はりっぱな帽子です」

勝也もまけてはいない、

「アカンタレ勘太には似合わん」

「この帽子をかぶったらアカンタレでなくなるの、ナイフの先みたいにするどい声に、勝也はひるんだ。

「負けたらあかんよ」

おかあさんにそういわれても、勘太は肩をすぼめてぶるぶるふるえていた。

レンゲのかんむり

イッ子せんせいがしゅっせきをとりはじめた。「名前をよばれたら、ハイと元気よくこたえるのよ」

勘太の席はさいぜんれつ、イッ子せんせいは勘太のつくえの前にたっている。

せんせいは背がひくいのに、勘太が首をぐっとそらさないと顔はみえない、あおぎ見ると、まるい顔からやさしい笑みがこぼれている。

(こないだもこんな顔してはった)

勘太は1週間ほど前のできごとを思い出した。

おかあさんの買い物ものについて行くとちゅう

だった。タバコ屋のわきのポストにイッ子せんせいがはがきを入れようとしているのを、おかあさんが気づいた。

「あら、宮井先生、むすこの勘太、こんど入学しますねん」

宮井先生、名まえは衣津子、先生になってまだ1年、いつもニコニコ顔だ。みんな「イッ子せんせい」とよんでいる。

「ああ、アカン……勘太くんね、勘太くんのクラスの担任になるのよ」

イッ子せんせいになれなれしくしていた勘太のお母さんは、たいどをガラッとかえた。

「アカンタレですけど、よろしくお願ひします」

と、頭を九十度いじょう下げる。

「勘太、ちゃんとあいさつしなさい」

「……」

カンタです、と言おうとしたが、声がでない。勘太ののどが、北極にほうりだされたみたいにこおりついてしまってる。

「すいません、しつけをきちんとしてなくて」

ぺこぺこ頭をさげるおかあさんの後ろに勘太はかくれた。

「井田勘太くん」

イッ子せんせいがなまえをよんだ。教室じゅうにひびく大きな声だ。そろっと勘太は手をあげ



教室の後ろにいたおかあさんが、
「勘太、ハイといいなさい」
と声をはりあげる。
勘太が声をしぼりだした。

「おしっこ」
わーっとみんなが笑った。おかあさんは顔を
まっかにしてその場にしゃがみこんでしまった。
「お便所にいきたかったのね、いいわよ、いって
らっしゃい」
というイッ子せんせいも出席簿で笑いをかく
している。

勘太は自分でもなぜ「おしっこ」と口ばしった
のかわからない。声をだそうとしたら、どうい
うわけがおしっこがもれそうになった。

校舎はコの字型になっていて、勘太の教室は

た。でも「ハイ」
がのどからでて
こない。のどの
奥がびしゃっと
戸じまりしてる。
ウンウンなっ
てるだけ。
いまにも泣きだ
しそう。
「勘太くん、いな
いの？」

門の左、便所は門の右がわだ。講堂で入学式をお
えたばかりだから、勘太は便所のばしょをしらない。

勘太はいつのまにか門のそとに出ていた。

まわりはいちめん田んぼ。どの田んぼにもレン
ゲソウが植えられていて、レンゲの花がひらひら
と風にそよいでいる。

勘太は赤紫のレンゲのせかいにふらふらっと
入りこんだ。

「どうしたのかしら」

いつまでたっても勘太がかえってこないの
で、イッ子せんせいは便所をのぞきにいった。

「勘太くん、どこにもいない」

大さわぎになった。先生もお母さんたちも手
わけして探しまわる。

「レンゲ畑かもしれん」

とつけたのは勘太と幼稚園がいっしょだった
哲則だ。20分ほどして、勘太はみつかった。

勘太はレンゲソウをつんでいた。

「何するの？」

イッ子せんせいに、勘太は鼻水をすすりあげ、
ぼそとこたえた。

「レンゲのかんむりを作るねん」

「なんのため？」

「イッ子せんせいにあげるんや」

読切り連載

アカンタレ勘太 <2>

作 いの しゅうじ

えんそく

おすしのお弁当



「えんそく、えんそく」

勘太はリュクサックをせおって、家のなかを歩きまわっている。

1年生の春のえんそくは、毎年となりのH町のゆうえんちと決まっている。

入学して1カ月あまりがたったころ、イッ子せんせいは黒板に大きな字で、

「えんそく」

とかいた。

「いいですか、今度のすいようびがえんそくですよ」

せんせいに言われなくてもみんな知っている。

「ハーイ」

おもいきり元気なへんじが教室中にひびいた。

勘太が家にかえるとリュクサックが居間の



ちゃぶだいにおかれていた。おかあさんが買ってきたばかりのま新しいリュック。左右のポケットに青い線がはいっている。

勘太はさっそくせおってみた。背中にリュックがやわらかくふれる。つんとすましてるランドセルとはおおちがい。

勘太は3げん向こうのなのはな畑にでかけた。あぜにすわり、リュックからおべんとうを出すしぐさをする。むねがはじけそう。

早くこいこい、えんそくが「お正月」の童謡をかえうたにして口ずさんだ。えんそくの前の日。学校からかえると勘太はおかあさんの買いものにつきつきり。おべんとうに巻きずしをつくったげる、と約束してくれ

たのだ。

かんぶつ屋さんでノリやかんぴょう、北島のやおやさんではミツバ、肉屋さんで卵。

ゆうしょくを終えると、おかあさんは巻きずしづくりにかかった。

「おべんとうで恥かきとうないねん。じょうずにつくってや」

「心配せんでええ、だれよりもおいしそうなおすしができるさかい」

といいながら、にぎったごはんを巻きずしの上にのばして、くるくるっと巻くおかあさん。そのすばやい手さばき。勘太は目をかっとひらいて見つめている。

えんそくの日がやってきた。

電車とバスをのりついでゆうえんちへ。イッ子せんせいを先頭にゲートをくぐる。

勘太の目は飛行塔をさがしていた。塔のてっぺんからつり下げられた飛行機がぐるぐる回る飛行塔。そのそばの広場で食事をするはずだ。

お兄さんの淳吉が、「飛行機見ながらべんとう食べることになってる」

とおしえてくれたのだ。

「きれいな小川がある」

淳吉のことばを勘太は頭にいれた。

園内をうろうろしているうちにお昼のじかん



になっ
た。

やはり
飛行塔の
そばの芝
生の広場
だった。
淳吉のい
うとお
り、ほぼ
まん中を
小川がな

がれている。はば3メートル、深さは50センチくらい。勘太は川のそばにすわった。

巻きずしは竹の皮につつまれている。ひざにのせて、竹のひもをほどいたときだった。岸からムカデがはいでてきた。

「ギャー」

勘太はぱっと立ちあがった。巻きずしはひざから竹のつつみごと小川におちた。

「あ、しまった」

と大声をあげたのはイッ子せんせいだ。川岸にいる勘太を見て、

「こっちに来なさい」

と言おうとしたやさきだった。

おすしは竹の皮の舟にのって、ゆらゆらとな

がれている。

「ぼくのおすし、およいでる」

勘太は川にはいるうとした。

「だめ、はいつては」

イッコせんせいのきつとすどい声をとんだ。

せんせいは、菓子パンの一つを勘太にあたえた。巻き貝のかたちのパンだった。なかにチョコレートがつまっている。ほおばると、やわらかなチョコレートが口いっぱいひろがった。

そのふわとしたあまい味を勘太はいつまでも忘れなかった。

レーシングカー

イッ子せんせいにもらったパンを勘太がたべおえたとき、テツちゃんが近よってきた。

だれにでも話しかけることができる哲則。じょうだんを言ってけらけらと笑う明るいせいがかくだ。入学して1週間もたたないうちに、みんなに「テツちゃん」とよばれるようになっていた。

テツちゃんの家は勘太の家の近く。ようちえんがいっしょだから、入学前からのともだちだ。テツちゃんが勘太の家になんどもあそびに来ているので、勘太のおかあさんもテツちゃんをよ



く知っている。

「べんとう落としたこと、おかあさんに黙っていてや」

「ぼくは口がかたいんや」

テツちゃんは口にチャックするまねをした。

「あとでレーシングカーのりに行こ」

食事のあと、一つだけ乗り物にのれるのが決まり。おべんとうのまえ、テツちゃんにさそわれて勘太はメリーゴーランドとモーターボートにのった。メリーゴーランドは回転木馬。モーターボートは池の中をぐるぐるまわる回転ボート。テツちゃんはカタカタ名の回転ものがすきなのだ。

レーシングカーはこのゆうえんちの一番にんき。よそにないゴカートをと、さいきん、先がとがった最新型車を取りいれた。こども新聞に「アメリカ生まれのスマートな車」ととり上げられたので、にちようびには長い行列ができ

るそうだ。

レース場はちょっけい20メートルの円形。6台の車があり、右まわりで3周する。車は、はば50センチ、長さ1・5メートルくらい。

よその小学校の子ども4、5人が並んでいた。じゅんばんを待つ間、テツちゃんは、「ぼくはのったことあるねん。ぼくの後についてくるんやで」

と、さもせんばいづら。

「そやけど心配や。おべんとうのことがあるよって」

テツちゃんのよけいな一言がいけなかった。勘太は「運転ようせん」といえず、「だいじょうぶ」とむねを張ってみせた。

テツちゃんがのった車がさーっと走りだした。次の車がとうちゃく。勘太はかかりのお兄さんにうながされて車にのった。

はっしゃしない。4、5秒たってお兄さんはあわてた。

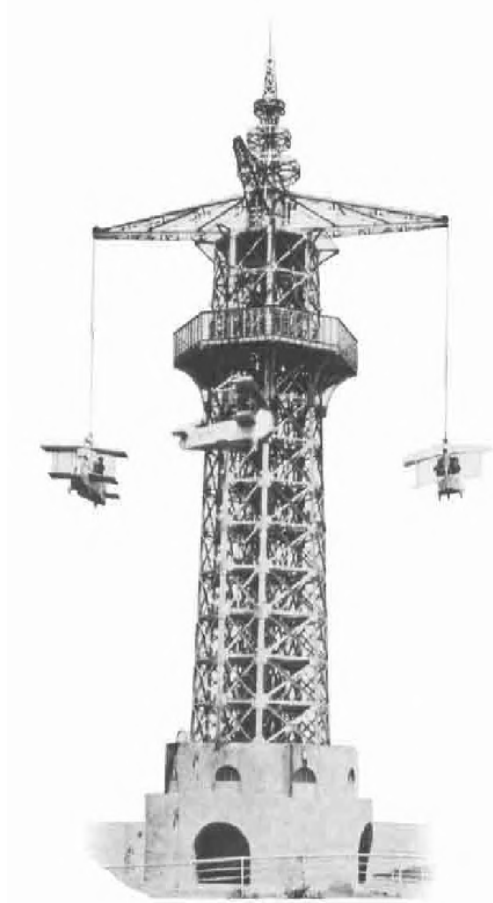
「ペダルに足のせるんや」

「そうそう、ペダルふんでごらん」

車がそろっとうごいた。5、6メートルほど走るとよたよたしだした。

「ハンドルもつんや」

お兄さんの大きな声がひびいた。じゅんばん待ちをしていた同じクラスの勝や隆三らが「な



にごとか」とレース場をのぞきこむ。

勘太は「ハンドル」がなんのことかわからない。どうすればいいのか、頭はパニック、足はこちこち。ペダルだけはふみつつづけている。

車はもたもたしながらすすんだ。

「ハンドル右にきれ」
お兄さんの叫びと、車がレ

ース場の壁にぶつかるのは同時だった。

「グワー」

というにぶい音。お兄さんがすっとんできた。

壁にはゴム板がはりつけてある。車にきずがないことがわかって、ほっとした顔のお兄さん。

車にのり、勘太の横にわりこんで運転をはじめ

る。
「アカンタレ勘太、アカンタレ勘太」

勝と隆三が声を合わせてはやす。テツちゃんも気づいて車をとめ、ふりかえって見ている。

お兄さんは3周はしってくれた。「1周だけでええからおろして」とも言えず、勘太はただうつむいている。

その日の夕ごはんのとき。おかあさんがうす笑いをうかべた。

「勘太、おすしどうやった」

「おいしかった」

「川でびしょぬれになったん、食べたんやね」

「ムカデがわるいねん」

「レーシングカーもムカデおったんか」

といいながら、おかあさんは腹をかかえている。

次号に続く

読切り連載

アカントレ勘太 <3>

作・挿絵 いの しゅうじ

げんし人

ほら穴

勘太は校門のところでイッ子せんせいをまっている。隆三のおとうさんから「げんし人がよこ穴にすんでた」と聞いたので、げんし人とよこ穴のことをたずねてみようと考えたのだ。

せんせいが自転車でやってきた。

「あら、勘太くんじゃないの」

いつもおどおどしているのに、きょうはどうしたの？

というおどろきの目で勘太をみつめる。

「げんし人ってどんな人ですか」

「げんし？」

「よこ穴にすんでた人です」

「あ、原始人ね。原子爆弾かとびっくりしたわ」

せんせいはククッとわらう。

「じゃあ職員室にいらっしゃい」

イッ子せんせいのつくえは職員室の窓のところ。入り口でもじもじしていると、せんせいが「こっちよ」と手でまねいてくれた。

「どうしてげんし人のこと知りたくなったの」

隆三のおとうさんが教えてくれた、とこたえると、せんせいは書だなから絵本をとりだした。

本のだいは「日本の歴史 旧石器時代」。「狩りをする



古代人」のページをひらくと大きな絵。石オノを手にしたターザンみたいな姿の男たちがシカをつかまえている。

「二万年以上も昔よ」

「よこ穴にいたんですか」

「ほら穴にいたんじゃないかしら。スペインに有名な洞くつがあるわ」

勘太には、せんせいの言うことがよくわからない。お宮さんの森であそんだターザンごっこが、げんし人ごっこだったとわかっただけでも、しゅうかくだ。

教室にもどると、隆三がそばによってきた。

「よこ穴できたんや」

隆三のおとうさんがきのう山に行って準備したらしい。

つぎの日曜日。テッチャンに武史、徹がくわわって隆三の家へ。

おとうさんがドンゴロスという布袋を五枚、作業小屋からとりだしてきた。ナイフで底を二十センチほどあけて、両わきをばさっと切る。

「着てごらん」

子どもたちが頭からかぶる。ゴワゴワして着ごちがわるい。

「げんし人や。ぜいたく言うたらあかん」

おとうさんはなべ、まないた、アルマイトの食器、みそ入りの袋、キャベツを子どもたちにもたせる。みそ汁をつくるつもりらしい。

「カンテキとマッチは？」

カンテキは七輪のこと。テッチャンがたずねると、隆三のおとうさんはニヤツとわらった。

「出発や」

隆三のおとうさんの後についてうら山をのぼる。十分もすると頂上。さらに山がつづいている。ササがうっそうとしているだらだら坂を三十分ほどすすむと、せまい空き地にでる。

「着いた」

空き地は草がぼうぼうに生い茂っていたが、隆三のおとうさんがわざわざ刈ってくれていた。

空き地のむこうに巨大な岩がすいちよくにたっている。その岩の下には、何かにえぐられたような大きな穴。

はばと高さが二メートル、奥行きは三メートルくらい。

「子どもどころ、ここであそんだんや」



げんし人の横あなやった、とおじいさんから聞いたという。

「うそやと思うけど」

わらいながら、おとうさんはほら穴の中から、ノート半分くらいの石を五個もってきて、なわで棒にくくりつけた。

「石オノができた」

勘太らが石オノを手に、

「シカがりだ」

とはしりまわる。そのころあいをみはからって、隆三のおとうさんは大きな声でみんなを呼んだ。

「さあ、火をおこすぞ」

火おこし

隆三のおとうさんが板を布袋からとりだした。長さが二十センチくらいの杉の板だ。

「これで火をおこすんや」

テツちゃんが「マッチは？」ときく。「使わん」という返事。

歴史が好きという武史が自信ありげにたずねる。

「火打ち石を使うんでしょ」

「ちがう」

おとうさんは布袋から三十センチくらいのなわ、五十センチくらいの細い棒をだした。

「火をおこす道具や。どんなふうになわに火が生まれるか考えとき」

と言って、なわをとときほぐし、ふわっと丸くしている。

「何につかうのん」と勘太がたずねると、おとうさんは地面に「火口」とかいた。

「ひぐち？」

「ほくち、と読むんや。これが火だねになる」

「おふるたるとき、はじめに新聞に火をつける。その新聞みたいなもんか」

テツちゃんの質問におとうさんは、

「そや、その新聞や」

と笑顔でこたえ、

「枯れたススキをさがしといで」

とみんなに命じる。

そういえばここに来るとちゅう、ススキが風にゆれていた。

ススキを取ってくると、お父さんはほら穴の入り口に、

ススキと木の枝を山形に組みあげる。

「さあ、はじめろぞ」

そばの切り株のうえに板と棒をおく。

棒の先に板をあてがい、両手できりもみにくるくる回しはじめる。

勘太は目をこらす。板が棒でこすられたところに木くずができる。

三分、五分 。木くずが赤くなる。

おとうさんはこの木くずを火口に移しかえる。

フーと息を吹きかける。ポッと小さく炎があがった。

「火や、火がついた」

テっちゃんは、体に火がついたみたいにこおどりした。

「マッチに火がつくのと同じりくつや」

といったのは武史。

「きみは賢いなあ」

隆三のおとうさんは火口を手のひらにのせ、その火口でススキに火をつける。しばらくすると木の枝に火がもえうつり、ポーと炎がもえあがる。

「せいこう」

おとうさんはみんなに用をいいつけた。

武史と徹はキャベツを切る石をさがす役、テっちゃんはおたまの代わりの枝を見つける役、勘太はなべに水を入れる役。隆三は火のまわりを石でかこってかまどをつくる役。

勘太は鉄なべを手に岩のうら側にむかう。岩の間から水がわいている、とおとうさんが教えてくれたのだ。

すぐに見つかった。だが草のうえをチョロチョロと流れているだけだ。

二十分たっても勘太は帰ってこない。

とがった石でキャベツを切りおえた。みそをなべに入

れるおたまの準備もできている。

なべはまだかとみんなイライラしている。

ようやく勘太の姿がみえた。

「勘太、はしれ」

テっちゃんが大声をあげた。

勘太は水がいっぱいになべをかかえながら走る。

煙がぱっと目にはいる。ほら穴の手前の小さな段差にけつまずいた。

体がぼーんと宙にはねる。

「あっ」

と勘太がさげんだとき、なべが手をはなれた。水が滝になってどっとかまどに流れおちる。

ジュー。

たちまち火は消えてしまった。

次号に続く

読切り連載

アカンタレ勘太 <4>

作・挿絵 いのしゅうじ

空飛ぶえんぼん

勘太は二年生になった。

一学期の始業式の時、イッ子せんせいが、
「あしたから完全給食が始まります」

一年生の三学期に給食の日があったので、みんな給食のことは知っている。そのときはコッペパンとミルクだけ。おかずはなかった。

「おかずもつくのよ」

「おかずはうれしいけど、ミルクはいやや」

ユキちゃんは口もとをゆがめた。

イッ子せんせいは黒板に「脱脂粉乳」とかいて、

「だっしふんにゆう。今はしかたがないの」
と、しよぼんと言った。

つぎの日、四時間目がおわるといよいよ給食時間。

最初の当番は男の子と女の子それぞれ三人。六人は、ミルクやおかずがはいったバケツ、アルマイトの食器をおさめたかごを調理場から教室までさげてきた。食器にミルクやおかずをわけいれて、みんなにくぼる。

はじめてだから手ぎわがわるい。十分いじょうたってようやくみんなの机に食べものがならんだ。



ひらたいお皿が二つあって、ひとつにはコッペパン、もうひとつにはおかず。おかずはクジラのあげものと干ぎりのキャベツ。おわんの中にはミルク。

せんせいもいっしょに食べる。
「いただきます」

元気に声をそろえたとき、用務員のおじさんがドアをあけた。

「せんせい、電話です」

イッ子せんせいは、はっと顔色をかえ、
「ごめんね」

と、とんで出た。

パンはほとんど味が無い。クジラのあげものは冷えて

いる。けれども勘太は気にならない。おなかをすかしていたので、すすっとたいらげる。

やっかいなのはミルク。ぬるっとしていて、表面にうっすらと白いまくができていて、口にふくむと、回虫くじよのシロップみたいなぐだっとした汁が、ねっとり舌にまとわりつく。

勘太は鼻をつまんで一気にのんだ。

食べおえてユキちゃんの食器をのぞいてみると、ミルクはちっともへってない。

「こんなん飲まれへん」

「むりしてでも飲め。ユキちゃんが食べおわらんかったら、あそびにいかれへん」

テツちゃんはユキちゃんに文句をたれながら、皿を指さきにのせてくるくるまわしている。

「空飛ぶえんばんみたいや」

と、武史は自分の皿をもちあげた。

「何や、空飛ぶえんばんって」

ときいたのは勘太。

「どこかの星から飛んできたんや。フライパンをさかさにしたみたいな形してて、うちゅう人が乗ってるねん」

武史はおとうさんから聞いたという。武史のおとうさんはぼうえき会社につとめている。

「アメリカで十年まえに発見されたんやて」

テツちゃんは武史の話にとびついた。

「よっしゃ、空飛ぶえんばんごっこや」

と、武史にむかって皿を水平にしてなげた。ゆかにカチャンとおちる。その皿を武史は勘太のほうになげる。

「ぼくもやる」



勘太がころころ転がる皿をひろって、隆三に投げよう
とすると、タミちゃんがさげんだ。
「やめとき。せんせいに言いつけるで」
「せんせい」のひとことに勘太の手もとがくるった。皿は
教室の入り口のほうにとんでいく。
そのとき、ドアががらっとあいた。
イッ子せんせいがはいってくる。えんぼんはおでこに
ゴツンとぶつかった。
せんせいは涙をうかべている。
「アッ、アウ、アアー」
勘太はふんづけられた子犬みたいな声をだした。

春の小川

イッ子せんせいは涙をハンカチでぬぐった。
「みんな、よく聞いてね」
せんせいは背をむりにのぼした。
「せんせいのおとうさんがけさ亡くなったの」
勘太がなげた皿があたったから泣いたのではないの
だ。
でも、お正月にせんせいの実家をたずねたとき、そん
な様子はなかった。
「むねの病気。二月ごろから急に悪くなったの」
せんせいの机には給食がおいたまま。涙がミルクにぼ
ととおちた。
「給食たべなきゃね」
せんせいは顔にわらいをつくって、
「ユキちゃん、せんせいが食べおえるまでにミルク飲ん
でしまうのよ」
とやわらかく言った。
せんせいは手早く食べおえた。ユキちゃんもがんばっ
てミルクをすっかり飲んだ。
「あすからせんせいはしばらく休みます。教頭せんせい
が代わりに勉強をしてくれます」
みんな「えっ！」と顔をあげた。
朝礼のとき、教頭せんせいはいつも、「気をつけ」と命
令して、「話は目でできく」と訓示をたれる。そのすがたをイ
ッ子せんせいはいやそうに見ている。だから勘太も教頭
せんせいを好きになれない。
教頭せんせいが教室にはいってきた。
さいしょは国語。野口英世のものがたりをみんなで声

にだして読む。きりのよいところで、せんせいは、
「野口少年はどうしたんや」
とたずねる。(当たりませんように)と下をむいている
勘太を見すかしたように、「キミ」と指さした。
こたえられない勘太を、
「手にやけどしたんだ」
と、こわい目でにらみつけた。
こんなぐあいだから、勘太は毎日がびくびくだ。
五、六日たった土曜日。テツちゃんが、
「イッ子せんせい、がっこうにくる」
と声をはりあげた。
おそう式のために実家にかえったせんせいは、あした
の日曜日にもどってきて、月曜日からいつもの授業にな
る。「教頭せんせいからきいた」とテツちゃんがいうと、ワ
ーとみんなわきかえった。

ユキちゃんひとり、しくしく泣いている。
「イッ子せんせい、かわいそう」
テツちゃんがユキちゃんの顔をのぞきこんだ。
「あした、せんせいのところに行こ」
「うん」
ユキちゃんがこくりとうなずく。「ぼくも行く」と勘太。武
史も隆三もタミちゃんも、みんな「行く」と言いだした。
せんせいの下宿はまんかん寺のうらの長屋。六畳の部
屋に間がりしている。
外ががやがやしているので、せんせいが引き戸をあけ
ると、おおぜいの子どもが立っている。
「どうしたの？」
「せんせいをなくさめに来ました」
と武史。目がまんまるになったイッ子せんせい。

「ここはせまいから」
みんなを近くの小川につれていった。
「春の小川の歌をうたいましょ」
はばが二メートルほどの川の兩岸に、男の子と女の子
がむかい合って並んだ。せんせいは川の中のひらたい石
のうえで指揮をする。

♪春の小川はさらさら行くよ 岸のすみれやれんげの
花にすがたやさしく色うつくしく 咲けよ咲けよとさ
さやきながら

「せんせいはね、みんながやさしくて心のうつくしい子
なので、とってもうれしいの」
イッ子せんせいの声はさわさわしていて、春のそよ風
みたいだ。
でもまぶたはうっすらと赤くはれている。
と気づいた勘太。ワーッと泣きだした。

次号に続く